

『五天竺』におけるインド認識

石 崎 貴 比 古

0. はじめに

世界が本朝（日本）・震旦（中国）・天竺の三国によって成立つといういわゆる「三国世界観」は、18 世紀初頭に変化し、亜細亜，欧羅巴，利未亜，亜墨利加，墨瓦蠟泥加からなる「五大州」という世界認識の枠組みへ移行したとされる¹⁾。例えば西川如見の『増補華夷通商考』（宝永 5 年，1708 刊）では，天竺は東南アジアから南アジアを漠然と包括する概念として用いられるが，1 つの国としては紹介されず，亜細亜の概念がそれらの地域を包括する。同書の「地球萬国一覽之図」と，寺島良安の『和漢三才図会』（正徳 3 年，1713 頃成立）に掲載される「山海輿地全図」は，五大州の世界像を可視化した好例である。しかし，五大州の概念が導入されてなお，如見も良安も世界を記述するために未だ天竺の語に頼らねばならず，古いインド認識の枠組みは即座には消滅しなかったと考えられる²⁾。

また，如見や良安のような当時最先端の認識が，近世社会の一般の人びとに浸透していたかは疑問である。例えば，文化 13 年（1816）7 月 29 日初演の人形浄瑠璃『五天竺』は如見，良安の著作から一世紀近くを経たものである。「五天竺」とは古代インドの地理区分に端を発し，仏教を媒介として日本に伝わった概念である。この作品は演題が『五天竺』というばかりでなく，筋書きや台詞の端々になお三国世界観や天竺の語が垣間見られる点で注目され，物語自身も広く庶民に読まれた³⁾。『五天竺』はこれまで演劇史や中国文学の立場から研究の蓄積があるものの，日本人の対外認識を考察するという文脈で読み直すことができるのではないかと考えた。そこで本稿では『五天竺』の作品分析を行い，近世日本の庶民レベルで受け入れられたインド認識の特徴について論じることを目的とする。なお，以後作品名を『五天竺』，用語としては「五天竺」と表記する。

(2) 『五天竺』におけるインド認識 (石 崎)

1. 『五天竺』の概要

全22段の『五天竺』は①玄奘三蔵、②孫悟空、③釈迦如来という異なる3人の主人公の物語の複合体である。段が変わるごとに主人公と舞台が変わり、最後に3人が出会うことで物語も1つに収斂して幕を閉じる。①と②は『通俗西遊記』(宝暦8年に初編刊行)や『画本西遊記全伝』(『絵本西遊記』、文化3年に初編刊行)を典拠とし⁴⁾、主に唐土を舞台とする。③は正徳4年(1747)頃の初演とされる近松門左衛門の『釈迦如来誕生会』をそのまま流用したとされ、天竺が舞台である⁵⁾。

『五天竺』は『西遊記』が日本人向けに消化され、独自の物語として形成されたという点で西遊記受容史の重要な事例と考えられている⁶⁾。その物語世界は根強い人気を持ち、初演以降、江戸時代に8回、明治以降も14回上演されている⁷⁾。このうち天保11年「いづ卯板」番付口上書を見ると、なかなかの評判だったことが分かる⁸⁾。また、その版本が貸本屋の営業品目の一つになり、大きな影響があったと考えられる⁹⁾。

2. 『五天竺』における「天竺」とインド認識

次に『五天竺』のインド認識について検討すると、3つの特徴が挙げられる。第一に「インド」は未だ三国世界観の一角を担う「天竺」という形で表現される。例えば魔けい修羅王が混世王に釈迦の阻止を命じる台詞を見てみよう。

ヤアヤア混世。我レ欲界の主ジと成って。三千世界を魔道になさんと謀る所に。時キ至つて今天竺まがだ国。浄飯大王が子に。釈迦といふやつ出ッ生し。仏ツ道を尊み。唐土(土か)日本三国に弘んとする事。【怪石の段】(傍線、括弧内は筆者。以下同)

釈迦が仏道を広めるべき唐土と日本と、天竺が「三国」とされている。

玄奘三蔵と云フやつ此天竺へ渡り。釈迦に対面し唐土(土か)へ持ち帰り。日本迄も弘めんと此辺を徘徊なす。【須達長者の段】

唐土に持帰り帝に捧。猶日本に弘給ひ。三国一致となすべしと。【祇園精舎の段】

玄奘の行いは仏法を唐に持ち帰り、日本へ流布させることだと語られている。このような表現から旧来の世界観が物語の中に息づいていることが分かる。

なお、これら三国はいずれも「浮き世」であり、善悪の区分などといった性質を異にするわけではない、ということが以下のような部分に表現されている。

善と悪クいづれ天竺唐土もかはらで同じ心なる。【天竺御殿の段】

さまゝの。浮き世渡タリは。天竺も唐も。日本ンも異ならず【白蓮子別れの段】

如見や良安の世界に比べ、『五天竺』における天竺はさらに細かな地理区分へ分化する以前の形で想起されているのである。

第二に「五天竺」という用語の使用法である。『五天竺』において天竺という語は計 36 回登場し、そのうち 7 回が「五天竺」という形で用いられる。

されば釈尊の御父帝は浄飯大王と申奉り、五天竺の君として【天竺御殿の段】
 耶輸多羅女と申奉るは二つおくれて十七才、五天竺第一の美人【花園の段】
 ヤア五天竺の主同然ンの提婆公の仰を背くは憎いやつ【林丹子住家の段】
五天竺第一須達長者と申せしは、八万八千の蔵々にあらゆる財宝満々【須達長者の段】
 某提婆達多が正法を尊む事、五天竺に隠れなし、【須達長者の段】

このほかの用例も「五天竺」という言葉は「全天竺」といった意味で用いられている。注意すべきはこれらの段がいずれも天竺を舞台とし、『釈迦如来誕生会』に依拠した部分だということである。また、「五天竺」は天竺に住む人々が自称として口にする語であると言えるだろう。この語が作品名になった具体的な経緯は不明だが、天竺という語に付随するイメージを喚起し、人々の関心を引こうとした可能性はあるだろう。すなわち、中世以来続く仏教説話で語られるようなイメージや、宝暦 7 年 (1757) 以来、たびたび上演された一連の「天竺徳兵衛」ものに見られるような、現実世界とはかけ離れた荒唐無稽な場としてのイメージである。当時用いられた天竺という語は現在のインドと等号で結ばれる地理的な概念だったとは必ずしも言い切れず、ある種「異国」の代名詞だったとも言える¹⁰⁾。その異国性を強調するために、「五天竺」を表題として用いたのではなかろうか。

第三の特徴として、「西天竺」という語が計 14 回用いられているのに対し、北天竺、南天竺、東天竺、中天竺という「五天竺」の他の地理区分は一切登場しないことが挙げられる。

三蔵法師と呼ぶべしと、仰は正に西天竺、三蔵秘密の御経を、取得て帰り給ひぬる【経山寺の段】

此度玄奘勅命によつて西天竺へ趣く道守護の役は其方へ兼て申付置つれば身を慎て勤べきに猶旧悪を改ず天理に逆ふ無法の乱妨、所存有やとの御答聞より【人参菓の段】
 此僧を誰レとか思ふ、唐の帝の勅命イにて、西天竺へ立チこへ経文を求め給ふ玄奘禪師ともしらず、慮外ノ働くきりうじめ、【流沙川の段】

この他、「西天竺婆羅奈国」とした 1 例を除き、いずれも「西天竺」は玄奘が趣くべき地、到達した地という文脈で語られている。玄奘の事績は『大唐西域記』から『西遊記』へと続く系譜によって語り継がれてきた。その中に見出される世界は仏教的世界観によって語られ、「インド」は仏国土であるとともに、中国か

(4) 『五天竺』におけるインド認識 (石 崎)

ら見た天竺として認識されている。『大唐西域記』に記された玄奘の足跡は西域を通じて西北インドへ至る道筋だった。つまり長安を出発点とすれば天竺は「西」を経由していくべき地方だったと言っていいだろう。『五天竺』に多用された「西天竺」は、「天竺における西」というよりも、むしろ「西であるところの天竺」、あるいは「西にある天竺」として捉えたほうが当時の認識により近いのではないだろうか。だからこそ、玄奘が趣くべき地は「西天竺」なのだと考える。

3. おわりに

以上のように知識人の間では五大州の概念が浸透しつつあった時代において、『五天竺』のように天竺や三国世界観の概念が未だに用いられる例があることが分かった。作者は大衆向けに天竺という言葉を用いることで、仏教説話のイメージや「天竺徳兵衛」に語られるような荒唐無稽なイメージを沸き立たせようとしたのではないか。ただし、『五天竺』のような物語の世界に三国世界観が見受けられ、天竺の語が頻出したとしても、人々が実社会において、同じように考えていたかどうかは別問題である。天竺という概念が三国世界観が崩壊したとされる時代を経てもなお存続したのか、あるいはあくまでも異国を表わす記号として、物語の世界でのみ用いられる概念に留まったのか。庶民の教育と世界に関する知識の浸透については今後の課題としたい。

1) 例えば荒野泰典「近世の対外観」(朝尾直弘ほか編『岩波講座 日本通史 13 近世 3』, 岩波書店, 1994, 213-249 頁)。 2) 石崎貴比古「西川如見のインド認識—三国世界観から五大州へ—」(『印度學仏教學研究』, 第 59 巻第 1 号, 2010, 502-499 頁)。

3) 現代では国立劇場芸能調査室(編)『五天竺 付・二世豊竹此太夫について(未翻刻戯曲集・8)』(国立劇場, 1981)によって活字化されている。なお、本稿の引用は同本による。 4) 磯部彰『西遊記受容史の研究』(多賀出版, 1995)。 5) 国立

劇場芸能調査室(編)『源平布引瀧・五天竺・双蝶々曲輪日記・紅葉符(国立劇場上演資料集 194)』(国立劇場調査養成部芸能調査室, 1981)。 6) 磯部, 前掲書。

7) 国立文楽劇場調査養成課(編)「上演年表」(『文楽 五天竺 増補忠臣蔵(国立文楽劇場上演資料集 12)』, 国立劇場, 1985)。 8) 義太夫年表近世篇刊行会(編)『義

太夫年表』(八木書店, 1979)。 9) 磯部, 前掲書。 10) 永吉雅夫『「天竺」という意匠』(『追手門学院大学文学部紀要』40 号, 2004, 78-68 頁)。

〈キーワード〉 天竺, 三国世界観, 西遊記, 五天竺

(東京外国語大学大学院)